No.25

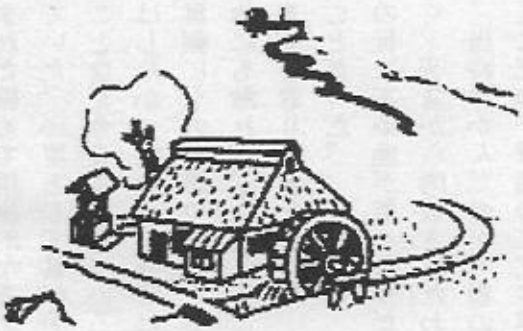
芥川だより

編集発行人 下村嘉明
発行所
☆ 着物から服へ
着物から服を仕立てます
高槻市芥川町2－14－3
TEL072－681－8870

発行日＊＊＊2008年9月1日　e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
皆様からの投稿をお待ちしております
http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

＊＊＊＊＊＊＊＊　今回は２枚なので一部 **40円** です　＊＊＊＊＊＊＊＊

まわらない水車



高度成長を迎える前の田舎には、山間の谷筋に必ずといっていいほど水車小屋があった。私が育った村にも、幾つもの水車が谷水をとゆで引いて「ガッタン、ガッタン」と絶え間なくまわっていた。

そんなのどかな風景と打ってかわって、水車小屋の中に入ると、大きな杵が雑穀の入った石臼を打つたびに地鳴りがし、引きいれられる水が滝音のよう鳴り響いて、あまりの轟音にすぐに逃げ出した思い出がある。

村はずれの谷筋を半時間ばかり登ったところに三軒の家があった。なにぶん辺鄙な所であまり訪ねる人もなかった。そこには老人たちが仙人のような生活を営んでいた。ヒョウサンもそのうちの一人だった。彼は東京で近衛兵を退役した後に各地を放浪して、故郷に帰ると、身内がみな亡くなっており家が絶えていた。世をはかなんだヒョウサンは村はずれの山奥に庵を構えた。炭焼き小屋のように杉皮で屋根や周りを囲み、土間に囲炉裏を造って、寝床は藁で設えてあった。生涯独身をとおし、財産といえる田畑もなく、近在の農家の手伝いで僅かばかり稼ぎ、暮らしをたてていた。

ヒョウサンの小屋から小さな谷を渡った所に水車があった。木で四角に造った樋から勢いよく水が流れ落ち「ガッタン…」とまわっていた。ある日、焚き木の荷運びの手伝いで通りかかったとき、水車が止まったままになっていた。母は「ヒョウサンは遠くの養老院というとこへ行っちゃったみたいやで」という。

当時は老いた病人は家で看取られて亡くなったものであるが、身寄りのない人は養老院に入ったのである。養老院へ行ったと聞いて、一層あわれな気持ちを抱いた。その時を境にして、３軒の家がたてつづけに廃屋になった。

小さい時の記憶はいつまでも鮮明に残るものだ。ひと気が無くなった谷間に、まわらない水車がとり残されたように朽ち果てていった。村人の親切で養老院に入ったヒョウサンも間もなく亡くなったと聞いた時、ほんとうはあの杉皮の小屋で死にたかったんだろうなと思った。

祖父も祖母も病院に行くことなく自宅で亡くなったが、父は長く入院して病院で亡くなった。尊厳の失った哀れな最期を見て、自分の死に際というものに思いをめぐらせるようになった。自分の死様は医者任せにせず己が考えねばならないと思った。(嘉)

＊＊＊＊＊＊＊＊いい人　いい街　いい笑顔＊＊＊＊＊＊＊＊

ご融資のことならお気軽にどんなことでもご相談ください。

摂津水都信用金庫芥川支店

TEL 072－681－1871 ＊ FAX 072－681－7567

死―①
若き頃

立木　理

今年五十七歳、そろそろ「命の終わること」をしっかり自覚しなければならぬ年だ。私以上の方なら「その年で何を言っている」とお叱りを受けるかもしれません。その通りです。「死」というテーマは、同時に「生」をテーマとすることだと心得ています。

産まれた時に始まっていながら、日常的には最も遠くにおいているのが死である。生と死は最大のテーマとして古き賢人達が、その死生観を多々語っているが、私は、論理的・普遍的なそれではなくもっと身近にある一つの死、私の死として考えてみたい。

私の周り（親族）には自ら命を絶つ人が多かった。祖祖母は九十歳で、母方の祖父は七十歳を過ぎた頃に、近所に住む父の従兄弟が五十半ばで、死を選んだ。

病や老衰による死も死に違いないが、死というと自ら命を絶つことに私は通じてしまう。若き頃の考えでは、私は今ここに存在していなかった筈であるが、既に三十年が過ぎた。

かつて私は、二十七～二十八歳で命を絶とうと考えていた。それは、この世の不条理性と自身の生命力の弱さから生まれた極めて消極的な考えから始まっていた。一度として具体的行動をとることなく今日になっている。何故そうはしなかったのか。当時はそれなりに真剣にものを思っていたし、多くの書物にも触れた。だが今から思うと、ただ苦痛を取り除きたかった、その程度のことだった。

この世に不条理が無くなったわけでもなく、苦痛から開放されたわけでもない。当時浮かんだのが、親の顔。親より先に死ぬ、罪悪の二文字が重なった。答えは、単純に「親より先に死んではならない」だった。

人でなしと非難されるであろうが、そこで自ら命を絶たないための足かせ（責任・義務）が必要と考え、幸い良き人（当時）に出会い家庭を作る。子供が出来る。十分過ぎる足かせとなる。とても死を考える状況ではない。

ところが一度「死」を考えた者は、行為は別にして何かそれに拘りを残している。大学生の時いくら探しても手に入らなかった一冊の本（原口統三氏の「二十歳のエチュード」）を偶然にも結婚後購入出来、毎夜愛しむように少しずつ読む。仕事を終えての夜の楽しみである。彼は何を思い、何を考え、若くしてこの世を去ったのか。それを少しでも知りたかった。頭脳明晰な人だったのだろう、抽象的過ぎて、なかなか理解が及ばない。

結婚して一年位過ぎた頃だろうか家に帰ると、ゴミ箱の中にビリビリに破られた本がある。拾い上げると「二十歳のエチュード」だ。問い詰める私に妻は、「あんたなんか結婚する資格ない、私より本の方が大事なんや」と捲くし立てる。私は、返す言葉も元気もなく、破られたページを繋ぎ合わせるしかなかった。再びこの世の不条理を観る思いの中で、妻の言葉通り自分は人と暮す性分でないと知らされた。

だが、一方で「人から人に通じる橋はない」と言うニーチェの言葉に反する思いが強く、人は人と通じずに何と通じ合うのか、神や仏と通じて心満たされるのか、とその後もずっと通じ合える人を探して生きている様に思う。

ペットもいいでしょう、植物もいいでしょう、だが人として生まれ来た以上、人は人と通じてこそ、その命を十分に生かしきれ、命あることの真の喜びを覚えることが出来ると私は思う。人と人とが通じるというのは、もしかしたら幻想かもしれない。単に願望しているだけかも知れない。幻想や願望であっても、命がなくなればそれも確認できない。

最後の一日で、最後の一時間で、最後五分で解けることもあるだろう。その最後の時まで私は、通じ合える人を探し続ける。そのとき私の傍には誰一人居ないかも知れないが、きっと思うだろう「私は、きっとあの人と出会うために生まれきたのだ、その人との関わりが最も人生を彩った」と。

かの哲人イマニエル・カントは「エス　イスト　グート」（これでよかった）と最後に言ったそうだ。

私の宝物的書物裂いた奥様は、今も私の上に君臨されています。お互い辛抱強いです。

サラリーマン・エッセイ⑧

死期をどう迎えるか

明石　幸次郎

人の一生を分けて考えますと、幼年期、思春期、青年期、壮年期となり、その後は、老年期となり、死期を迎えその一生を終えることになります。今日、我々の寿命が延びることは、もっぱら老年期だけが長くなることであります。この長くなる老年期を如何に生きて、その終着点の死をどう迎えるかと言う〝大きな課題〟を、私たち中高年は遅かれ早かれ答えを出せと各人が天から問われているのです。

日本人男子の平均寿命が既に八〇歳を超えていますので、サラリーマンが定年を六〇歳で迎え、会社生活から自由になってから、その後二〇年もの歳月を重ねていかなければならないのです。二〇年と言えば人が生まれてから成人になるまでの年月であります。驚くことに日本には百歳以上の高齢者が二万五千人余もいて、その内の八五％は女性でありますが、もしこの長寿の人達のように生きれば、定年してから四〇年も生きなければなりません。もし百歳近く生きたとして、充実した人生を全うできるかは、人それぞれでありますが、そこまで健康でやることがあれば良いですが、病気、孤独を抱えて苦しみながら生きたいと思う人が果たしてどれだけいるのでしょうか。

人は昔から老いるという課題に答えを出し続けてきました。夭折したり、生の半ばで命を失ったりした人の他は、皆老人と成るまで生き、老人として死んで行きました。時代によって老い方、死への近づき方は色々と異なっても、多くの人が老いと向き合って生きていたのは確かであります。老いとは老人の抱える課題であるとともに、中高年だけでなく本当は若い人にとっても宿題でもあります。それは、いずれ自分に誰でもやらねばならない、到底先延ばしに出来ない宿題であります。

さて、その老いは誰にでも一様に訪れるわけですが、それを迎える人の姿勢によって災いともなれば、自然の掟の穏やかな受け入れともなります。老いが一生の中で意味あるものとして位置づけるには、何よりもその人の主体的な意志と生き方が問われねばなりません。

昔から老いをよく生きるための不可欠の要素は「諸々の徳を身につけて実践すること」と言われています。これを必要条件とするならば、富や名声は付け足しに過ぎないのでしょう。財産のある愚者の老人の苦しみよりも、欠乏に喘ぐ賢者の老人の方が遥かに耐えるに値するものと言われます。我々は愚者の富と名声を求めがちであり、ともすると賢者の徳、知に思い及ぶことを忘れて終います。

老年について、先人の島崎藤村が書き残した文章に「六十歳を迎えて」と題されたものがあります。それによると、若い頃は何かに付けても「深く深くと入って行くこと」を心がけそこに喜びを見出していたが、年を重ねて様々な人と交わっているうちに、今は「浅く浅くと出て行くこと」の歓びを知るようになった、と言うのです。これは、年を取るにつれて、むしろ水平方向に視野を展開する歓びを見出すに至った、という事のようです。「浅く浅くと出て行くこと」が可能になったのは、自分の経験の高みに立つからこそで、その高みは若い日の行動、思索と言った深い掘削の繰り返しが築き上げたものに違いありません。

それであれば、老年はどこかで区切られた単独の時間ではなく、青年や壮年の連続の上にのみ訪れるものと考えるべきでしょう。理想としての老年は、歳を重ねる延長線に漂うものではなく、そこを目指す努力の歩みを続けなければならないということです。同時にそれが若い歳月の結果であるとの辛い自覚も忘れてはならないということです。

「歳月、人を待たず」ある日、ある時に突然と死期が来るのでしょう。その時にジタバタするのは、余りにも見苦しいものです。自殺とまでは行かなくてもその時に自死するような〈死〉を自分の意志で〝手に入れる〟くらいになりたいものです。それには、まだまだ仕残した人生の宿題が多くあり、今ここで、一つ一つの宿題をかたずけて、同時に徳を実践してサラリーマン卒業後の老年に向かって〝生きたい〟ものです。

連載小説◆負けるな！よっちゃん⑲

剣岳の大岩壁

梵店主

真砂沢のテント場は、剣沢と真砂沢の出会いの雪渓が消える小さな台地にある。石垣で周囲を囲んだ小屋もあるが、ここの主役は多く張られたテントの体育会系山岳部の連中であり、夏の合宿場なのである。

初めての夏山合宿であるよっちゃんには、何もかもが新鮮で、飯炊きは一年がやるから監督するだけで、問題は岩登りをトップで登らなければならないことであった。剣岳は「岩と雪の殿堂」と言われるぐらい岩ばかりの山である。その中で入門コースと言える八峰のCフェース・魚津高校ルートを登る。四時エッセンで五時前に出発、薄暗い雪渓を登っていく。二日間雪上訓練をして雪上での歩き方、ザイルの使い方を一年に教えた。よっちゃんは技術的には未熟であっても体力でカバーして何とか上級生としてのプライドを守った。体力だけではどうにもならないのが岩登りである。そんな不安は、長次郎雪渓の二股にある熊の岩の下に来て大岩壁を見上げた瞬間、大きさに圧倒され消えてしまった。

今回のルートは魚津高校山岳部のOBが初登したのでその名が付いている。南向き斜面の凹角と岩の割れ目にハーケンを打ち込んで登る。高度差が大変ある気持ちの良いルートである。よっちゃんは京都大原にある金毘羅の岩登りゲレンデではトップを登っていたが、こんな大きな岩壁は登ったことがない。頭に叩き込んだルートの詳細をイメージしながら登り始めた。一年にザイルを確保させて登る、十メートル位の所でハーケンを打ちザイルを通すと更に上に登り続け四十メートル近くまで登ったところで、一年を確保して登らす。ザイルで確保しているからスリップしても大丈夫なのだが一年はビビッてなかなか登って来ない。岩場は常に落石があるので早く通過しなくてはいけない。ザイルの先にいる一年は見えないがザイルを触る手の感触でルートの何処をどんな感じで登っているか分かる。「はやく登って来い」と幾度も言う。岩登りは難しいところほど早く登らないと手の握力や足先が疲れてしまう。ところが怖いから踏ん切りがつかないから止まってしまう。もしも、途中で登れないなどと一年に言われたら、その瞬間遭難状態になる。だから岩登りは常に危険が一杯である。そのスリルが醍醐味でもある。足元がスパッと切れた岩から下をのぞいたら怖さよりも壮快さが強い。もしザイルが切れたら、ハーケンが抜けたら、落石が当たったら等心配事は尽きない。それらの心配は時々現実となる。

一年が息を切らせながら登ってきた、ザイルを手繰り寄せセルフビレーをとらせてよっちゃんはトップで登る。こんな繰り返しでとうとう岩の頂に着いた無事に登れたのであった。危険なところは岩を登った後の油断であるので更に気合を入れて稜線をたどり剣の頂に出た。他のルートを登っているパーティーを待ち長次郎の急な雪渓を一緒に下る。よっちゃんはこの雪渓を下るのが嫌であった。グリセードで急な斜面を滑り緩くなれば歩くのであるが急なとこが怖いのである。

テントに全員が無事そろい夕飯の用意を一年がする。よっちゃんは指示しながら天気図を描く。夏の天気図は太平洋高気圧が居座って快晴が続くケースが多い。シュラフを出して横になりながらリーダーのM蔵と話をしながら夕食のできるのを待っていた時であった。「山岳警備隊ですが遭難事故が発生しました。協力者を出してもらいませんか」といきなりテントの外で声がした。リーダーのM蔵は四回生のS太と相談して、よっちゃんにも「ええか」と声をかけて「二名出します」と大きな声で警備隊員に叫んだ。よっちゃんとS太は急いで非常装備をザックに入れてテントを出た。時間を争うから夕食は抜きである。十名程が遭難現場を目がけて駆け上る。昼間登った岩場で落石にやられたらしい。

夕闇が迫り暗くなって来ている。そのうえ雪渓が冷えて固く凍って歩きにくいが皆は黙って走る。よっちゃんは遅れることが許されない雰囲気であると瞬時に感じとった。途中で富山県山岳警備隊の幾人かが加わり更にスピードをあげて急な雪渓を駆け上がる。よっちゃんは周りの者たちがメチャクチャ強いと感心した。特に県警の若い隊員達は強い。一時間ほどで現場に着いた。落石に当たり足の大腿部を切断し出血がひどく生命が危うい状況なのでロープで切断部を縛り出血を抑えスノーボートに乗せた。スノーボートをザイルで確保して雪渓を駆け下りる。天気が悪くヘリが飛べないと言うから雪渓の出合いから、こんどは剣沢にある警備隊の詰め所を目指して駆け上がる。スノーボートを十人あまりで引っ張るのは大変疲れるが、そんな事を言っていられないから皆必死である。詰め所に着いた時はくたくたであった。腹が減っていて、足腰も疲れていたが県警の人から「どうもごくろうさん」と礼を言われて我々の仕事は終ったので「さあ、テントへ帰ろ」と言いながら真っ暗な道を帰った。テントに着きすぐにシュラフに潜り込み寝た。この遭難者は運良く助かったと後日聞いた。救助作業はお互い様だから頼まれれば行く。事故の起きる時は、天気の悪い午後に多かった。

女優・松井須磨子（5）

大正八年（一九一九）元旦、「カルメン」の初日があいた。

三日の舞台では、須磨子はセリフを間違えたり、なかなか言葉が出ない場面もあった。演技の間が悪く、共演者をまごつかせたりした。いままでになかったことだ。

四日も朝から、普段とどことなくちがっていた。有楽座に出かける前に芸術倶楽部の舞台に立ってみたり、道具部屋に行ってみたりしていた。最期の場所を見定めていたのだろう。

舞台では、カルメンのうたう調子が低くて音楽に合わなかったという。幕間の休憩のとき、一人寂しく廊下にたたずんで床をじっと見つめていた。いつもより口数が少ない。夕食に好物の天丼をとったが、まったく手をつけなかった。

十二時ごろ芸術倶楽部に帰ってから、いつも居間で夜食をとるが、いらないと断っている。「みんな先にお休みなさい」といって、自室にこもった。

日付が変わって、抱月の月命日である五日を迎える。仏壇の前でひそひそ泣いていた。泣きながら遺書をしたためたのだろう。

暁近く、甥の武昭に宛名のところに封書（遺書）をもっていくように言づけをして、自室にもどり、最後の仕度に取りかかった。

美しく化粧をし、大島絣に着替え、水色繻珍の丸帯をしめ、指輪をはめた。髪は女優髷にする。すっかり旅立ちの身じまいをととのえ、道具部屋へ向かう。最期の場所に立ったとき、須磨子はあの世で抱月と出会えるとかたく信じていたにちがいない。おそらく躊躇することはなかっただろう、首に緋の腰紐をかけて、椅子を蹴った。

遺書は三通で、赤坂にいる兄の米山益三、坪内逍遙夫妻、劇作家の伊原青々園に宛てられていた。抱月と同じ墓に埋めてほしいという願いがいずれの遺書にも記されていた。青々園宛の遺書には「只一つはかだけを同じ処に願ひたうございますくれぐれもお願ひ申し上げます、……では急ぎますから何卒何卒はかだけを一緒にして頂けます様幾重にもお願ひ申し上げます。同じ処にうめて頂く事をくれぐれもお願ひ申し上げます」とくどいほどくり返している。この須磨子の切なる願いはかなえられなかった。

新劇の女王、松井須磨子の自殺が社会にあたえた衝撃は、いろいろなかたちになってあらわれた。流行歌になったり、いろいろな赤本が書かれたり、後追い自殺までするものまであらわれた。死の二十三日後には『恋の哀史　須磨子の一生』が出版されている。仲木貞一が伝記を書き、俳優や劇作家など二十人あまりが追想を寄せた。映画もすぐに企画され、一年後に封切られた。

長谷川時雨が「松井須磨子」（『明治美人伝』）というエッセイのなかでいろいろなエピソードを記している。時雨が舞台外で会ったときの須磨子の印象がある。いつもキョトンとした鳩のような目つきで時雨の顔を眺めていた。文芸協会の研究生のころも、女優界の第一人者になってからもそうであった。川上貞奴の引退興行に招かれて落ち合ったとき、女優養成所に一時在籍したこともある作家の田村俊子が須磨子に「なぜ挨拶しないのよ。黙って顔ばかり見ていてさ。いったい知ってるの知らないの」というと、丸い目をして、舞台とはまるでちがう、生彩のない無邪気な目を向けて、黙ったまま、ずいぶん経ってから、ちょっと首を傾げて、挨拶とお詫びをかねた「こっくり」をした。それがたいへんよい感じを与え、可愛いところがある女と時雨は思った。同期の山川浦路も、須磨子が男優をけいこに誘うときの目は可愛いかったといっている。

抱月の死後、須磨子は寂しさのあまり、心のよりどころとなる男、抱月に変わる男を求めた。それは抱月の門人、楠山正雄だった。彼は結婚したばかりであり、抱月の変わりがつとまるはずはなかった。楠山が受けいれていれば、須磨子は死ななかっただろうともいわれるが、時雨がいうように、だれに愛を求めようが、抱月の尊さが胸に響き返ってくるだけで、満足することはなかったであろう。須磨子の死は必然だったのだ。

須磨子の老母は、他人に恨み言をいわれたとき「どうせ死に神に憑かれているのですから、こんど死ななくたって、どこかで死んだでしょう」と三十二歳の娘の死をあきらめよくいいきったという。

時雨はエッセイを次のように結んでいる。

「死ぬまで大芝居を打って見事に女優としての第一人者の名を贏得ていった。乏しい国の乏しい芸術の園に、紅蓮の炎が転がり去ったような印象を残して――」

「故郷」のマグダをはじめて演じたときの須磨子　二十六歳　明治四十五年五月
（早稲田大学演劇博物館）

江戸っ子エンちゃんの今昔⑭

東京の焼け跡で……

昭和二十年八月十五日、日本は戦争に負けた。それまで日本は負けたことがありませんでした。日清戦争にも、大国ロシアとの戦争にも勝ったように、こんどのアメリカ・イギリスとの戦争にも必ず勝つと信じていたのです。そんな私たちは、八月十五日、本当になんとも言いようのない虚しさのなかで、敗戦という惨めさを味わったのです。絶対に負けないと信じて明治、大正、昭和を生き抜いてきた主人の父は、陛下の無条件降伏という言葉を聞いて、歯ぎしりして泣いたそうです。

日本は、美しい自然に恵まれた素晴しい国土をもっています。ですが、領土が狭く資源が乏しい。その資源を確保するために、領土を拡大していったのです。「満蒙は日本国民の生命線」といわれたように、領土拡張は日本の存亡に関わる問題だという思いが国民の間にも浸透していました。領土拡大は、いまから思えば、随分厚かましい一人よがりな、他国を見下した愚かな考えだったような気がします。

敗戦をむかえたとき、主人の居場所はわかりませんでした。生死もわかりません。でも、私達はいま生きている。何とか生きていかなければならない。みな生きることに必死でした。

終戦直後に大阪の父が亡くなり、私は敗戦の混乱のなか大阪に向かい、父の葬式を終えると、一人になった姑を同居の親戚の方にお願いし、すぐに長野へ帰って来ました。

長野では病身の父を中心に、身体の弱い姉、女学生の妹達、そして母が疎開生活をしていました。

母は東京の家がたいへん気になっていましたので、様子を見に行ってもらうと、案の定、新橋駅前の焼け跡に家のない人が沢山集まってきて、勝手に商売をしている様子です。百坪程の実家の店では、見知らぬ人たちが勝手に物を置いて出入りしていたのです。

何とか早く東京へ引き上げないと、どんな人が勝手放題するかわからない状況だったのです。とはいえ、荷物をどうして運んだらいいのやら。高校生の妹が友達に運送屋さんがいるというのでお願いし、近所の方にも助けていただいて荷物を車に積み込み、年末には東京へ帰ることができました。

父や姉も元気で東京に帰ってこられたことは、この上ない幸せに思いました。私は、スカートやワンピースなど縫物の注文を受けました。また、町内会の事務員のお手伝いを頼まれ、月給をただくようにもなりました。

家の前の焼け跡はいつのまにか片付いけられて、その場所を利用して日用品の商売をしました。

大勢の人々がいつの間にか道を作り、その沿道には適当に組み立てられた店で雑炊屋さんをはじめる人もいます。列ができるほどはやっていました。焼け野原だった所に、いつの間にか地面に物を引いて、お店が沢山できてきました。電灯はありませんので、暗くなると店じまいして終りです。

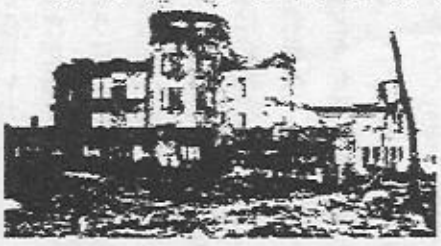
夜真っ暗になると、アメリカの兵隊さんとヨレヨレの洋服を着た女性が抱き合っています。私達は見て見ぬふりをして通り抜けます。

親と離ればなれになった子供達が、ちょっと身体の大きいおにいちゃんのまわりにくっ付いて寝ています。これもまた見て見ぬふりをして、子供達とは関係ないような冷たい顔をして通りすぎます。少しでも親切にしたら、いつまでもついてきて離れません。人間て、自分勝手でどんな顔でもするものだなあと思いましたが、仕方がないのです。

私の家は焼けなかったので、本当に助かりました。何しろ新橋駅という目標のあるために、爆弾・焼夷弾がよく落ちてきましたが、近くに宮城という爆弾を落としてはならない目標物があったのです。

家の隣のビルの、五階にアメリカの映画会社が入っていたそうです。空襲になると、その屋上でグリーンの電灯が点滅して、消防の見回りさんが注意をしていたけれど、あれは宮城の位置を知らせるためではないかと母が言っていました。妹も、家が焼失を免れたのはグリーンの電灯のお蔭かもしれないと言っていたことを思い出します。何が幸いするかわかりません。アメリカはやはり宮城を爆撃しないように擁護してくれていたのではないかと思われます。

ですが、原爆を落としたのもアメリカです。あの凄まじい威力は日本人の戦闘意欲を根本からへし折ったように思います。もし原爆が落とされなかったら、総玉砕の覚悟で本土決戦となって、計り知れない犠牲者を出していたでしょう。でも、原爆の被害は言葉では表現できないほど凄惨です。いまだに後遺症で苦しんでいる人たちもいるのです。被爆国日本としては、やはり世界中から核が廃絶されることを願うばかりです。



原爆は広島を一瞬で破壊しつくした。

クイズ

「幻の高槻城」

福嶋　努

一六〇〇年の関が原の戦いの後、徳川家康は、この高槻を直轄地として治めるようになった。大阪冬の陣・夏の陣を経た一六一七年には、幕府は西国経営の重要拠点としての高槻城を大幅に改修したが、その結果、城は、三層の天守と高石垣・土居を備えた近世城郭として生まれ変わった。

一六三六年には、長年に亘る城の拡張整備が完了した。城地には、本丸・三の丸などを内堀が囲み、三の丸・出丸・蔵屋敷・帯郭などを外堀が囲む、東西約五一〇メートル、南北約六三〇メートルの南北に長い凸形であった。城下町は城の北側と東側に広がり、北の芥川口と京口、東の前島口、南の大塚口・大坂口・富田口という「高槻六口」を通じて、西国街道と淀川とに結びついていた。

一六四九年には、幕府の厚い信頼を得ていた譜代大名永井直清が、三万六千石の高槻藩主・城主となり、以後十三代、二二二年もの長きに亘り、永井家がその座を継承した。

一八六九年（明治二年）版籍奉還、一八七一年（明治四年）廃藩置県、そして一八七四（明治七年）には、北摂唯一の城郭・高槻城は破却された。解体された石垣の巨石は、小さく打ち割られて、城下の「京口」から梶原方面へ、「芥川口」から芥川方面へ運ばれた。京都・大阪間の『　①　』作りに使うためであった。城下の人達の中には、長年眺めてきた天守や石垣が無残に取り壊されていくのを見て、胸のつまるおもいをした人も沢山いたことであろう。

江戸時代には、高槻は大坂や岸和田などと共に城下町として栄えた。当時は、それぞれに立派な城があった。現在でも、大阪市や岸和田市では、城の姿を実際に見ることが出来る。ところが、高槻市では城の姿は全くない。威容を誇っていた昔の高槻城を心に描くことは出来ても、実際の姿は見ることが出来ない。なんともさびしい限りである。この一三〇年ほどの間は、高槻城は幻のままなのである。

問1、

① にあてはまる言葉を次から一つ選んで下さい。

ア、道路

イ、淀川の堤防

ウ、鉄道

前回のNo二十四号・芥川だよりのクイズの答。（伊勢姫・能因法師ゆかりの里）

問一、　ウ・古曽部

問二、　ウ・永井直清

携帯エッセイ▼8

「死に方」

母の介護をして考えさせられたのは、自分の老後の事だった。

「老後は、誰にも迷惑を掛けずに、苦しまずに死にたい」。強くそう思うようになった。

しかし、寝込んだ時は、どうするのか？

「自殺。それも薬で安楽死するのが良い。いずれそういうことが認められる世の中になるのではないか」などと考える。

「しかし、自殺は身勝手だ。遺された者の悲しみを考えると心が痛む」とも思う。

母が言っていたことを思い出す。

「迷惑かけて済みませんなぁ。早よう死にたい。しかし、こればっかりはなー。お迎えが来るのを待つより、仕様がありませんのや」

答えは急いでも出て来そうにない。ゆっくり考えることにする。（龍）

俳句

養女

○　緑陰に子らの合唱足止まる

○　友病死電話に扇子はたと止み

○　薄物を一枚重ねる雨模様

新連載

爺捨て山　①

梵店主

私の田舎は山奥にある。今流行の限界集落に近い状況である。今生きてる高齢者が亡くなれば、廃村になる。

そんな田舎の家の息子達がいま困っていることは、草刈りである。街に出て暮らす彼にとって、すぐ大きくなる雑草を刈る作業は重い負担なのだ。そこで、草刈りを互いに助け合うことからはじめた同級生がいる。彼と話を幾度かした。

「跡継ぎはどうするんや」「継ぎたいという子はいないから俺で終いになる」

「田んぼや山はどうすんや」「誰かに売らな仕方ないやろ。おまえ、買ってくれるか」

「ちょっと話を聞いてくれるか」と私は話を切り出した。

「今の年寄りは世話してもらえるけど、わしらは、どうなるんやろ？」「そら、だれも世話してくれへんわ」「爺捨て山を作ったらと思うやが」「なんやそれ？」

同級生は冷静に私の話を聞いて、「うん、それはおもしろいかも知れん」と意外な返事を返してきた。

私の考える「爺捨て山の郷」構想はこうである。

（続く）

連載　女８０年の軌跡　　眞糀さん

1、振り返る

自分が進んでしてきた事が、他人をも喜ばす。自分もよろこび、人も喜ぶ。何の苦にもならなかった。たった一言で、人のためになっていなかった事に気付いた時は、人生八十年なんだったのか。ちょうど自分が泳げないのに忘れて人を助けに川へ飛び込むのと同じゃなかったのか。考えあぐねて辛かった。何んと馬鹿な事をしてきたのかと。

何でも見ておれぬと直ぐとび出す型と先ず自分の事を損にはならぬ様に考える型とあり、どちらも優先するのは難しい。

人の為に尽くすというような事は長続きはしない。自分も犠牲にせず、人も犠牲にせず。共に成長してゆく事が理想と気付いたのは遅かったのだろうか。

2、おのれの記憶

忘れよと言われて忘れるものか！と、わざわざ苦しみを長持ちしようと努める事さえある。忘れようとする事は救いなのか。

惚けのすすめと受け取られるかも知れない。二、三年もすれば必要以外の事は忘れてしまう。又忘れるから良いのだと思う。しかし、捨ててしまうのとは違う。記憶を捨ててしまったら惚けだろう。

よい事を教えてくれた人がある。

一日の予定を紙に書き、番号を付けておき書いたらサッと立って一番の仕事にかかる。終ったら消して二番にかかる。終ったら三番にといった具合。つまり忙しいと思うのは一度に色々な事をせねばと気にするからで、一をする時は二、三の事を忘れるのがコツ。取り越し苦労や、もち苦労は禁物。

取り組んでみたら案外すーと片付いてゆく。

3、人生百年

おばあさんが社会を動かす時代がきっとくる。今の二十代、三十代の女性が二〇五〇年の地平から考えてみれば。

子ども時代は勉強、大人になれば仕事、定年後は暇、女性の場合は、育児・介護にぬりつぶされしまう。そんな人生から転換を図らなければ駄。人は衰えながら、病みながら、老いながら生きていく。そんな体になってもなお、社会に参加し何かお役に立てればという思いを大切にしたい。

人間が長生きするようになったからこそ、「この社会は良くなった」と胸を張るときが来るか。

自分の体験を生きたコトバで、息づかいをしながら、若い世代に伝えなくては・・・。一人の人間の中には七人十色の多面的な人生があり、後期高齢者になった自分にも、まだ、何かお役に立てることがあれば・・・

自分自身がしたいことを考えれば山積みされている。でも、残された人生で、成し遂げられるはずがない。見果てぬ夢を見るのは高齢者の特徴であろう。

にもかかわらず言葉にしたい。人に伝える時間がなく、いろんなあやまちが繰り返されてしまった。そんな時代をつくり、その時代を生き抜いたのが自慢にならない高齢者の歴史だったのではないかと思う。

編集後記

今回の発行は、「恐る恐る」の心境なのです。有料化したことと、紙面内容が皆さんの御理解を得る事が出来るかどうか。

ここ一ヶ月ほど、「死」についてのテーマが「芥川だより」にとって本当にいいだろうかと考えていましたが、やはり今の自分の中で思いが強く、他に思いつかなかったので、十回にわたり「私はこんな死に方をしたい」など死に関わる投稿をお願いして紙面作りをしたい。

新たなホームページも開設して、毎日ブログも更新しております。気軽にアクセスして楽しんでいただければ幸いです。（嘉）

http://www.justmystage.com/home/akutagawa/

9月の芥川商店街の催し

★第１６回　楽の会　亀屋寄席
９月１５日(敬老の日)午前１１時開演

★第７回　　亀屋講談会　高槻座
９月２４日（水）　　午後７時開演
割烹旅館　　亀屋
電話　０７２－６８５－０１２３

※

★割烹・居酒屋　おぐら
９月９日(火)オープン

※

★9月８日（月）～１０日（水）
「ゆったり・はおる」
着物で風を羽織るようなイメージのブラウスやジャケット、ベストを作ってみました

着物から服を仕立てます　**梵～ぼん～**